

<序章近現代社会経済史>

この章で学ぶこと

* 国民国家, 工業化, 社会主義

絶対王政を批判した啓蒙思想は、古典古代のギリシアやローマに範をとりつつ、自然権思想や社会契約説、民主主義といった近代社会を準備する思想を構築していった。18世紀末、新大陸で起こったアメリカ独立革命と、ヨーロッパを巻き込んだフランス革命の二つの市民革命は、個人と国家が直接結びつく国民国家を誕生させる。1789年のフランス革命から1815年のウィーン体制にいたる市民革命期、1815年から1848年までのウィーン体制の保守反動期、ウィーン体制崩壊後から1870年代初めまでの国民国家形成期。この時期には、先行する英仏両国を追って、イタリア統一、ドイツ統一、ロシア農奴制改革、アメリカの南北戦争、日本の明治維新など、後発諸国による国民国家形成の試みが行われた。そして、1873年の不況をきっかけに、国民国家を形成した列強が植民地獲得をめぐる競争し、1914年の第一次世界大戦にいたる帝国主義の時代が到来する。19世紀を中心とした近代（長い19世紀）は、国民国家形成をめぐる展開した。

一方、18世紀末には、市民革命とともに二重革命とも称される産業革命（工業化）が、イギリスで始まった。人類の生産力を上昇させ、社会を変容させた点については、工業化は先史時代の食糧生産革命と並ぶ影響を人類社会に与えたとも言えるだろう。工業化の進行した先進地域では、従来の社会構造は大きく変化、農業人口を都市人口が上回るようになり、第一次産業革命では工場労働者（ブルーカラー）が、第二次産業革命では新中間層（ホワイトカラー）が、新たな社会層として登場した。

しかし、工業化による資本主義生産の確立は、一方では労働者階層の長時間低賃金労働や、都市の環境悪化など社会労働問題を引き起こした。このような資本主義社会の矛盾の克服のために、社会改革を志向する社会主義者たちが登場する。

第一次世界大戦末期にロシアで発生した社会主義革命は、最初の社会主義国であるソヴィエト連邦を誕生させた。一方、イタリアでは、社会主義から転向したムッソリーニによって国民社会主義（ファシズム）が唱えられた。第一次世界大戦から第二次世界大戦の間の戦間期は、社会主義と資本主義とファシズムの三つの陣営が形成され、相互に対抗していく時代でもあった。そして第二次世界大戦によってファシズムの陣営が崩壊した後、資本主義と社会主義の二つの陣営による冷戦の時代が到来する。第一次世界大戦の1914年から、ソヴィエト連邦が崩壊した1991年までの現代（短い20世紀）は、戦争と社会主義革命の世紀となった。そして資本主義が唯一のシステムとなった現在、グローバリゼーションという名の世界の一体化の深化の下で、様々な問題にわれわれは直面しているのである。

1918 国際協調

1929 全体主義

1945 冷戦体制

1945 冷戦体制

1991 グローバリゼーション

1991 グローバリゼーション

国家体制の変遷

* 国際連盟と国際協調

- ・ 集団安全保障の試みも弱体
- ・ ヴェルサイユ体制 (欧州)
- 敗戦国に過酷な戦後処理と独ソの排除
- ロカルノ条約とソ連のネツプ政策で一応の安定へ
- ・ ワシントン体制 (アジア・太平洋)
- * 第3インターナショナル (コミンテルン)
- 世界革命と民族解放を掲げ、世界のマルクス主義 (共産主義) 者を結集

* 全体主義 VS 資本主義 VS 共産主義

- ・ 世界恐慌を機に後発資本主義国 (独・伊・日) は植民地の再分割を要求、国内的には全体主義体制
- ・ 日本のワシントン体制打破
- ・ 満州事変を機に大陸進出を本格化
- ・ ドイツのヴェルサイユ体制打破
- ・ 第二次世界大戦を誘発
- ・ スペイン内乱→先進諸国は3つの陣営に分裂

* 資本主義 VS 共産主義

- ・ 国際連合成立も米ソ冷戦の本格化
- ・ 冷戦体制成立期 (1945-55)
- ・ 雪解け (1955-60)
- ・ 危機→米ソ共存 (1960-65)
- ・ 多極化と中・仏の台頭 (1965-70)
- ・ デタント (1970-75)
- ・ 新冷戦 (1975-85)
- ・ オイルショックによる不況を背景
- ・ 冷戦体制の崩壊 (1985-91)

* アメリカが唯一の超大国

- * 民族紛争・宗教紛争が各地で噴出
- * ヨーロッパ連合 (EU) の誕生
- 主権国家体制と国民国家を生みだした西欧が主権国家と国民国家の絶対性を否定
- 地域協力体制の必要
- 民族主義を越える共存体制構築の必要

資本主義システム

* 西欧の没落の開始

- ・ 戦争による工業地域の破壊
- ・ アメリカと日本の躍進
- ・ インドや中国での軽工業の発達
- * 世界金融の中心の移動
- ・ ロンドンからニューヨークへ

* 国際貿易体制の崩壊

- ・ アメリカの世界恐慌が世界に波及
- ・ 持てる国 (英・仏・米) はブロック経済で閉鎖的経済圏を形成
- 資源・植民地を持たない (少ない) 後発資本主義国 (日・独・伊) に打撃
- * 修正資本主義

* IMF・GATT体制 (西側)

- ・ ブロック経済の反省から国際貿易再建
- * 従属経済の拡大
- ・ 戦後独立した植民地も従属経済からの脱却は困難で、「低開発の開発」進展
- 南北問題
- * 資源・環境問題の発生

* グローバリゼーション

- ・ 自立 (自閉) した国民経済は困難に
- ・ 企業の多国籍化進展
- ・ 国際為替市場も投機の対象に→資本の流動性と投機性加速
- ・ 不平等な国際分業体制の拡大と深化
- * 資源・環境問題の深刻化

第二次産業革命

第三次産業革命

工業化・都市化

- * フォードシステムの普及
- ・ ベルトコンベアによる生産ライン
- ・ 規格品の大量生産を可能
- ・ 労働者の疎外の問題も発生
- * 大衆消費社会の出現 (アメリカ)
- ・ 家電製品 (冷蔵庫・洗濯機) 普及
- ・ ラジオ・ジャズ・プロスポーツ

* 世界恐慌

- ・ 大企業への集中が加速
- ・ 労働者の失業増大→労働組合や社会主義運動の活発化 or 全体主義体制での労働者保護
- * 映画産業などは伸長

* アメリカ風生活が世界の憧れ

- ・ 大量生産・大量消費文化の本格化
- ・ 大衆文化 (サブカルチャー) の台頭
- * 日本の工業の躍進
- ・ 軽工業から重化学工業への転換
- ・ 農村型社会から都市型社会への移行
- 農村地域共同体→会社共同体
- ・ 1980年代に米・独と並ぶ世界の工場へ
- ・ 総中流、バブルの時代

* 情報通信を中心とする産業革命

- ・ 企業は専門分業化
- ・ 非効率的な従来型大企業の没落
- ・ ホワイトカラー層の解体
- 情報通信革命による問接部門の縮小と高度専門職の必要性増大
- ・ 田中間層の解体
- ・ フランチャイズの進展と中小自営業の危機
- 社会の階層化が拡大の可能性

資本主義 VS マルクス主義 VS 全体主義

資本主義 VS マルクス主義

資本主義

超現実主義

現代文学 (物語小説、マジック・リアリズム、メタフィクション等)

心理小説

実存主義

社会主義リアリズム

思潮

文学史

近代 (1789 ~ 1914) 長い19世紀

1789 三重革命

1815

ウイーン体制

1848

ナショナリズム

1873

帝国主義

1914

国家体制の変遷

*自由主義と国民主義の理念が普及

- ・米・仏の初期ナショナリズムは国家理念を共有する者を国民→民族に非限定
- ・ドイツで民族主義ナショナリズム発生
- ・フランス革命は、国家と国民が直結する国民国家の樹立を目標→貴族・教会・ギルドの特権を排除し中間団体を解体

*フランス革命以前を正統とする保守反動

- ・自由主義と国民主義を否定
- ・プロイセン・オーストリア・ロシア主導
- ・イギリス自由主義改革
- ・経済政策は重商主義から自由貿易主義に
- ・1832年第一次選挙法改正→有産市民に参政権

*反動協力体制の崩壊

- ・クリミア戦争でオーストリアとロシアが対立→ドイツ・イタリアの統一へ
- ・国民国家の成立
- ・イタリヤ統一(1861) ドイツ統一(1871)
- ・ロシア農奴解放(1861) 南北戦争後アメリカ再編(1865) 明治国家成立(1868)

*同盟政策の時代

- ・勢力均衡を原則に同盟外交展開
- ・三国同盟と三国協商体制へ
- ・国民国家の発展
- ・各国は初等教育(国民教育)を整備
- 工業化社会の要請と国民意識の育成
- 社会的上昇の手段→国民統合を図る

資本主義システム

*産業革命による資本主義生産は、1820年代頃までにイギリスで完成

- ・西インド諸島の砂糖や、インドの綿製品など、国際商品の貿易で優位にあったイギリスが、「世界の工場」に移行。
- ・インドに納税者を土地所有者とする土地税制導入→没落住民発生し共同体変質
- ・中南米に続き、アジアも、欧米の従属経済へ転落していく契機に

*イギリスの自由貿易の主張に対し、ヨーロッパ大陸諸国(諸地域)は、保護関税政策による自国産業の育成を図る

→1830年代頃より、大陸諸国で産業革命が本格化

- ・イギリスは非ヨーロッパに市場を求め、ラテンアメリカ諸国の独立を支持、自国工業製品の市場へ(独立後もラテンアメリカ諸国の従属経済の構造に変化なし)

*イギリスとそれに続くフランスの経済発展は、自立した国民経済を持つ大国が、経済競争に有利との認識を普及

→イタリヤやドイツの統一運動の経済的背景

- ・ヨーロッパでの経済競争の激化→非ヨーロッパ市場の重要性が増大→クリミア戦争を機にオスマン帝国へ、アロー戦争を機に中国への英仏の進出

*ドイツとアメリカの工業発展でイギリスは世界の工場の地位を失う。1873年から1900年頃まで長く続く不況期に

- ・イギリスは「世界の銀行」として資本輸出(後進国への借款、鉄道や鉱山経営)に活路→市場・原材料及び商品作物供給地・資本の投下先としてアジア・アフリカを分割する帝国主義の時代へ
- 資本主義世界システム確立

第一次産業革命

第二次産業革命

工業化・都市化

*軽工業中心、イギリスで開始→大陸ではベルギー・フランスが先行

- ・17世紀の科学革命→実際の発明は現場の職人の創意工夫が中心
- ・中小企業中心で工場を所有し、工業生産による利潤追求を目指す産業資本家と、肉体以外に生産手段を持たず、産業資本家のもとで賃金労働を行う労働者が出現
- 資本主義社会の矛盾に、社会主義思想の出現
- ウイーン体制崩壊後ブルジョワ(資本家)(自由主義)と労働者(社会主義)の対立が表面化
- ・都市人口は急増、ガス灯の普及
- ・中世以来の欧州都市の問題である衛生問題、石炭燃料の使用による大気汚染など深刻化・コレラや結核などの都市の伝染病の流行→19世紀中ごろより、上下水道の整備や衛生問題への取り組みが本格化

*重化学工業中心、アメリカ・ドイツ中心

- ・実験科学の発達→科学研究の成果を技術開発に転用
- ・大企業の独占が進展→金融資本の形成
- ・工業化による労働者人口の増大
- 社会主義運動の高揚(全国的労働組合、社会主義政党、国際的労働運動<インターナショナル>)
- ・企業の大規模化→間接部門(企画・営業・経理・人事・総務)の増大→ホワイトカラー(新中間層)出現
- ・先進国の都市人口が農村人口を逆転→大衆消費文化が始動

思潮

人類の進歩と科学技術への信頼→功利主義・ダーウインの進化論→社会進化論は白人(文明)による非白人(野蛮)の征服を合理化

マルクス主義は革命による資本主義から社会主義への移行を主張

啓蒙主義

古典主義

VS

疾風怒濤

ロマン主義

VS

写実主義→自然主義

VS

象徴主義・耽美主義

文学史

近代ヨーロッパ史概観

二重革命の時代 (1789-1815)

自由主義と国民主義の拡大, イギリス産業革命

- 英 産業革命の完成期→工場制機械工業による資本主義生産が確立「世界の工場」へ
- 仏 フランス大革命とナポレオンの出現は、自由主義と国民主義の思想を全ヨーロッパに拡大
ナポレオンの大陸封鎖令はイギリスの産業革命に対抗し、フランス産業の育成も目的
- 独 仏軍に占領 フィヒテが「ドイツ国民に告ぐ」の講演→ナショナリズムに民族主義の要素
プロイセンでシュタイン・ハルデンベルク改革→上からの改革で国民国家形成模索
- 露 アレクサンドル1世の自由主義改革挫折→ツァーリズム専制体制と農奴制維持
対仏戦に従軍の青年貴族将校は自国の遅れを痛感→デカブリスト結成へ

ウィーン体制と大陸産業革命 (1815-1848)

正統主義と列強体制による平和維持

- 英 「世界の工場」背景に重商主義政策から自由貿易主義へ転換
東インド会社の特権撤廃, 穀物法廃止 (1846), 航海法廃止 (1849)
but 英の自由貿易主張に大陸諸国は保護関税→中南米・アジア市場開発へ
カニング外交で中南米諸国の独立支援→中南米の市場化目的
インドを機械織り綿布の市場へ→インドの伝統的綿産業破壊
中国へはインド産アヘンを密輸し, 茶購入による銀の回収を図る
アヘン戦争 (1840…42) →北京条約で5港開港と公行の廃止
- 仏 復古王政 (1814…1830) →七月王政 (1830…1848)
30年代より産業革命開始 (リヨンの絹織物が始まり, 進展は緩やか) →二月革命の背景
- 独 ドイツ連邦の成立→ブルシェンシャフトが統一と自由要求→メッテルニヒの弾圧
産業革命進展 34年ドイツ関税同盟発足 (プロイセン主導でオーストリアを除く経済統一へ)
プロイセン中心に鉄道建設事業活発化→産業革命の動因
- 露 デカブリストの乱鎮圧→ニコライ1世の専制政治 (ヨーロッパの憲兵)
オスマン帝国の弱体化に南下政策 (穀物輸出路の確保目的) →他の列強の反対で東方問題

国民国家の形成 (1848-1873)

各国は国民国家体制完成に努力

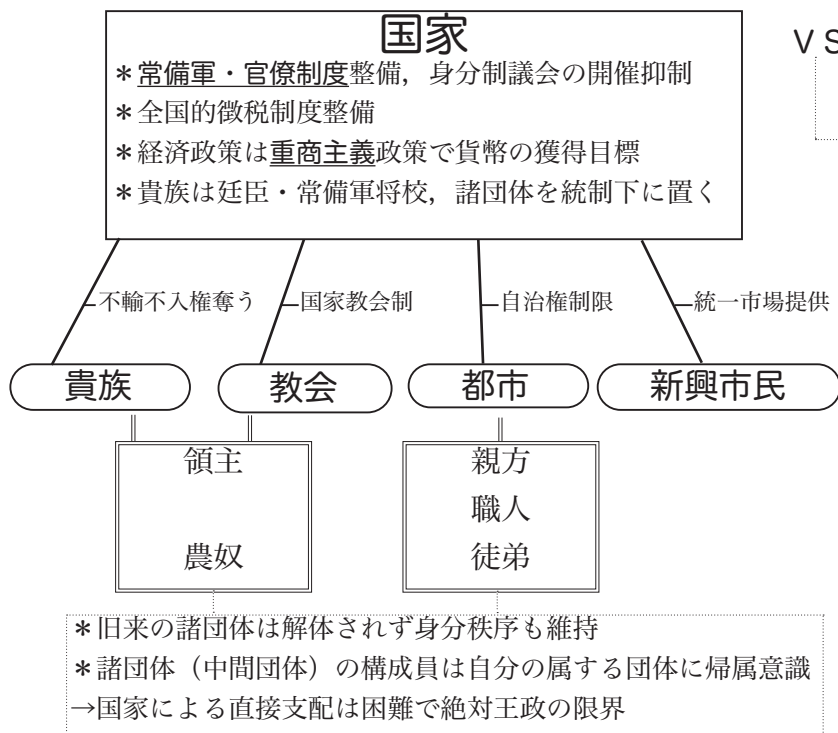
- * クリミア戦争時に露墺対立→反動協力体制崩壊し, 国際政治再編→イタリア・ドイツの統一に道
- 英 保守党ディズレーリ, 自由党グラッドストーンの2大政治家による議会政治進展
- 仏 第二共和政 (1848-1852) →第二帝政 (1852-1870) →第三共和政 (1870-1940)
産業革命の完成期→英と通商条約締結し自由貿易主義に転換→英仏の海外進出
- 伊 青年イタリア党のローマ共和国挫折→サルデーニャ王国の上からの統一→イタリア王国 (1861)
- 独 フランクフルト国民議会の挫折→プロイセンによる上からの統一→ドイツ帝国 (1871)
- 墺 イタリア統一戦争, 普墺戦争に敗北→オーストリア・ハンガリー二重帝国に国家再編 (1867)
- 露 クリミア戦争に敗北→アレクサンドル2世の農奴解放令で改革模索→ナロードニキ運動
- 米 南北戦争 (1861-65) →北部勝利で合衆国再編→南北戦争後, 工業の急成長
- 日 明治維新 (1868) 殖産興業・富国強兵で天皇中心に国民国家形成を目指す

帝国主義の時代 (1873-1914)

国民国家を形成した列強による植民地獲得競争

- * 米独中心に第二次産業革命→英仏は産業構造の転換に遅れ→英先導に資本輸出による利潤追求
- * 都市に大衆出現し, 消費文化 (ex. 仏のベルエポック)。国民教育制度整備による初等教育の普及
- * 不況を背景に労働運動激化→国際的労働運動や, 労働者政党の結成と議会進出

近世の絶対王政国家と主権国家体制



V S

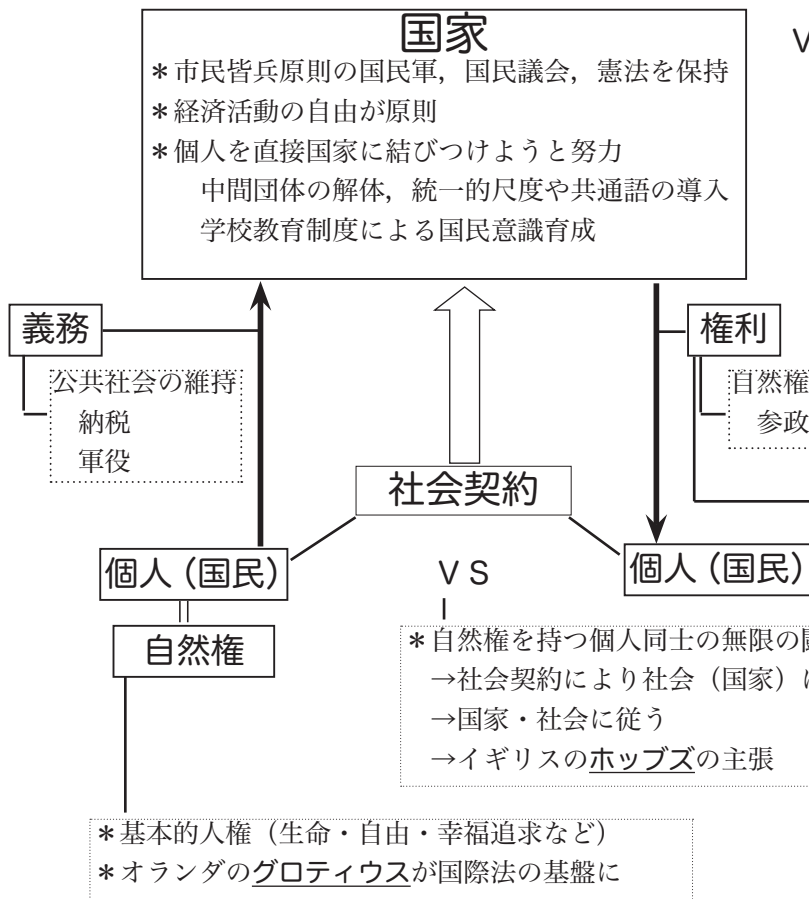
国家

V S

国家

- * 中世ヨーロッパはキリスト教共同体
皇帝権と教皇権が普遍的権威
- * 皇帝権教皇権の没落と国家の台頭
国家が皇帝権と教皇権の統制離脱
王権神授説で正当化
国家が主権を主張（主権国家）
領域内の諸団体を統制下に
- * 主権国家体制
領域を持った主権国家が併存
主権国家は大国も小国も平等
条約と国際法で関係規定
外交官を常駐
イタリア戦争で開始
→ **三十年戦争**で確定

近代国民国家と主権国家体制



V S

国家

V S

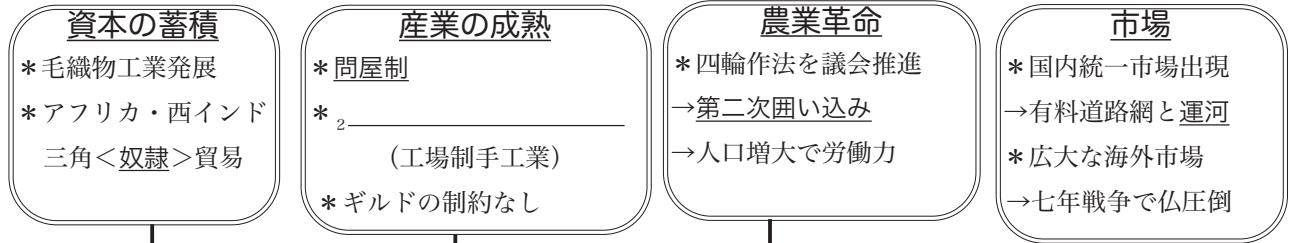
国家

- * 主権国家体制の下での国民国家間の戦争
→ 国力を全て動員可（**総力戦**）
→ 第一次・第二次世界大戦の損害
- * 西欧では主権国家体制と国民国家から共通市民権のEUへ移行

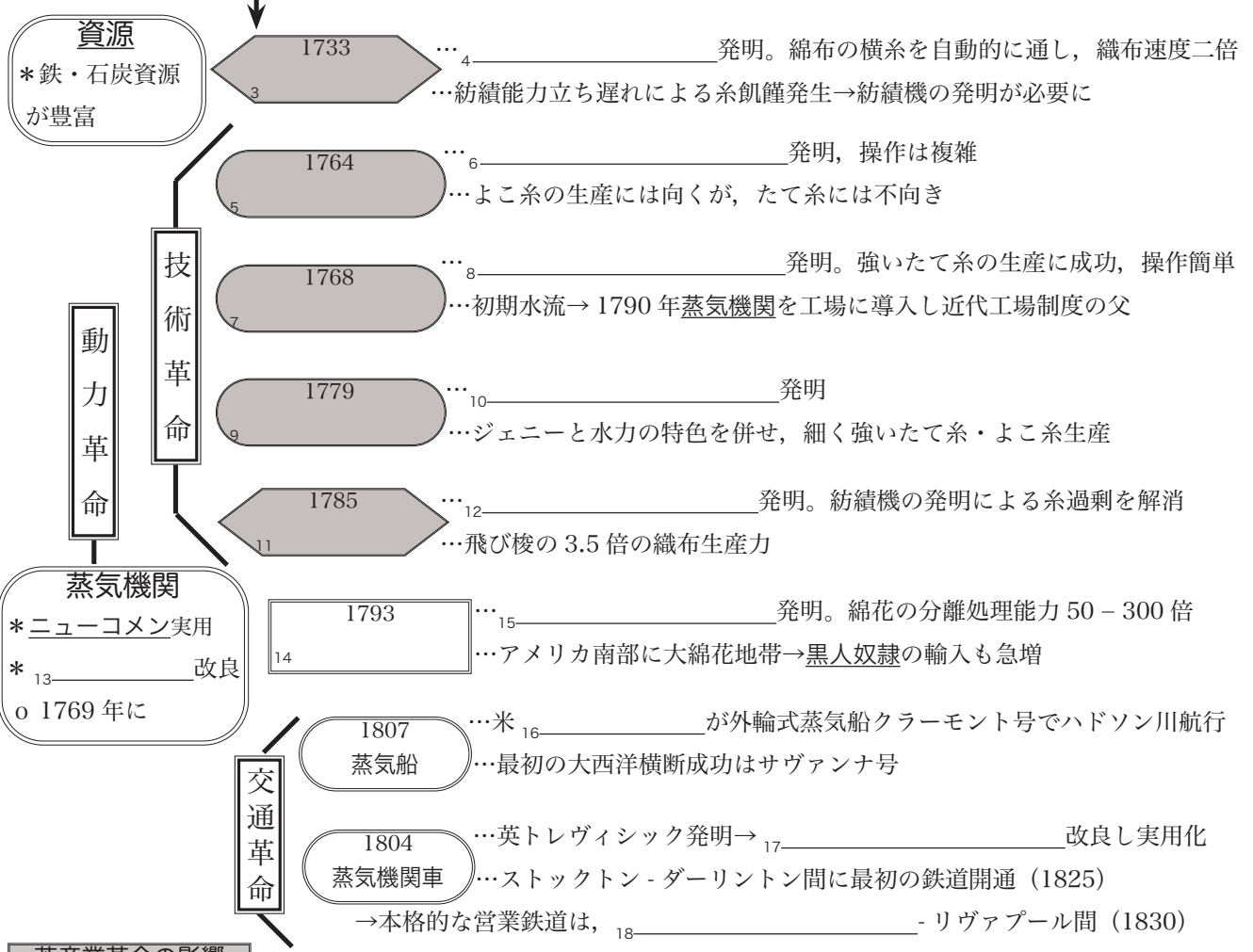
イギリス産業革命

産業革命の背景

- * **四輪作法** 18世紀農業革命の技術（ノーフォーク農法）小麦→カブ→大麦→クローバーの四輪作法
→第二次囲い込み（1. _____）食糧増産目的に議会公認で行われる
- * **大西洋三角貿易** 奴隷貿易の利益，アフリカ輸出用の綿布生産の要求，西インドでの綿花生産
→リヴァプール商人の投資で，ランカシャー地方の都市マンチェスターに綿工業勃興



綿製品需要増大
 ...東インド会社が18世紀以前の世界一の綿輸出国インドより綿製品輸入
 ...綿人気（キャラコ熱），大西洋三角貿易の輸出品→国内に木綿工業発展



英産業革命の影響

- * 19. _____ 父子は木炭に代わるコークス製鉄法の確立→鉄鋼都市 20. _____ の繁栄
- * 綿織物都市 18. _____ と海港都市 21. _____ 発展
- * 工場を経営する産業資本家の台頭と，労働者階級の形成→地主・ブルジョワ・労働者の三層構造の社会成立
- * 自由貿易を主張するイギリスに対抗し，後発資本主義国は保護貿易政策
→殖産興業・富国強兵策のため，国民国家の形成の必要性を認識→19世紀後半のナショナリズムの時代へ

1. 第二次エンクロージャー 2. マニユファクチュア 3. 飛び梭 4. ジョン=ケイ 5. ジェニー紡績機 6. ハーグリーブズ 7. 水力紡績機
 8. アークライト 9. ミュール紡績機 10. クロンプトン 11. 力織機 12. カートライト 13. ワット 14. 綿繰り機 15. ホイットニー
 16. フルトン 17. スティーヴンソン 18. マンチェスター 19. ダービー 20. バーミンガム 21. リヴァプール

イギリス農村の変化

*羊毛・毛織物産業発展…16世紀より商業革命・価格革命背景。初期フランドルへの輸出用→自国用

→第一次囲い込み（エンクロージャー）

羊の放牧地確保目的。非合法

没落農民の都市流入に救貧法の制定

* _____ …18世紀農業革命の技術（ノーフォーク農業）。小麦—カブ—大麦—クローバーの輪作

休耕地消滅し、家畜は飼料作物（カブ・クローバー）与えて舎飼。都市人口増大を可能

→第二次囲い込み（エンクロージャー）穀物増産目的。

仏との対立背景に議会承認し合法，18C末～19C初進展

農村共同体に代わり，資本主義的大農経営が普及

ヨーマン層消滅。地主・農場経営者・農場労働者に農村社会が三分

人口の増大と食糧供給を可能にし，産業革命の労働力

各国の産業革命（工業化）

◎ベルギー …1830年代から大陸最初に工業化を実現

◎フランス …ナポレオン1世の産業保護政策も進行は緩慢で，ナポレオン3世期に完成

◎アメリカ …米英戦争後，北部で工業化開始し，南北戦争後急速に進展

◎ドイツ …関税同盟の成立と鉄道の発達背景にプロイセン主導で→ドイツ統合の原動力

◎ロシア …農奴解放で基盤。1891年の仏資本導入のシベリア鉄道建設で本格化

◎日本 …日清戦争後に本格化

第二次産業革命

第二次産業革命の特徴

- 1870 年前後にアメリカとドイツ中心に発生→工業生産で、米が 80 年代、独が 1913 年イギリスを抜く
- 木綿工業など軽工業から鉄鋼・金属・電力・石油・化学など₁_____へ転換
- ₂_____と蒸気機関から₃_____・電気と内燃機関・電動機へ原動力変化

重工業中心のため生産規模と投下資本の巨大化

大企業に有利…

…資金融資の銀行の役割重要に

独占進展し資本主義は独占資本主義の段階

- ₄_____…企業連合・企業が協定締結
- ₅_____…同種企業の合同
- ₆_____…親会社頂点に系列化

銀行資本台頭

…銀行が親会社として産業資本支配

7 成立

帝国主義

…他国家・他地域へ支配を拡げようとする侵略的膨張主義（レーニン『帝国主義論』）

…第二次産業革命の進展で独占資本主義の段階に入った列強が世界政策で植民地獲得競争

- 過程 米産穀物の流入→欧州農業の不振→₈_____年大不況→市場・資本輸出先を求めアジア・アフリカへ
- 英仏は第二次産業革命への転換遅れる→「世界の工場」より転落し、「世界の銀行」に比重
→勢力圏を獲得し、鉄道建設や鉱山開発に資本投下
- 英・仏・露先行→米・独・日・伊参加→世界再分割・軍備拡大競争→2つの世界大戦
- 思想 スペンサーの社会進化論や優生学、文化人類学が、白人キリスト教文明の優越主張
「文明化の使命」…白人を優等人種とする人種主義で、植民地支配を正当化
黄禍論…黄色人種が白色人種に禍をもたらすとする主張で、ヴィルヘルム 2 世など喧伝

第二次産業革命と帝国主義の影響

労働者の実力向上

- * 全国的労働組合組織
- * 国際的社会主义運動
- * 労働者政党を結成し議会へ
 - 米 アメリカ労働総同盟
 - 英 労働党
 - 仏 (統一) 社会党
 - 独 社会民主党
 - 伊 社会党
 - 露 社会民主労働党

民族主義の台頭

- * 偏狭な民族主義が台頭し民族少数派への迫害・差別も激化
ex. 反ユダヤ主義（アンチ・セミティズム）
仏：ドレフュス事件 露：ポグロム

世界の一体化

- * 帝国主義諸国の世界政策や貿易・交通・通信手段発達背景
- * 世界貿易増加…1870 - 1913 年間で従来の 4 倍、冷凍船の開発
- * 人口海外流出
 - 欧州 不況で 3000 万以上流出。そのうち 7 割はアメリカ合衆国へ
 - インド・中国 奴隷に代わる安価な労働力（苦力）として
黒人奴隷貿易の終了で新大陸の人手不足
→合衆国の西海岸・西インド諸島へ流出
植民地の農園・鉱山開発・鉄道港湾建設の需要
→東南アジア・アフリカ各地へ出稼ぎ

国際運動の進展

- * 1864：₉_____…1863 年スイスの₁₀_____が戦争犠牲者救援提唱。本部ジュネーブ
- * 万国電信連合（1865）万国郵便連合（1875）…通信と郵便の国際機構。いずれも本部はジュネーブ
- * 1896：国際オリンピック…フランスの₁₁_____提唱。4 年に 1 度のスポーツの祭典
- * 1899：₁₂_____万国平和会議…ロシア皇帝₁₃_____の提唱で開催の軍縮会議
07 年会議にハーグ密使事件、ハーグ協定で毒ガスの使用禁止を決議、常設仲裁裁判所を設置

1. 重化学工業 2. 石炭 3. 石油 4. カルテル 5. トラスト 6. コンツェルン 7. 金融資本 8. 1873 9. 国際赤十字社 10. デュナン
11. クーベルタン 12. ハーグ 13. ニコライ 2 世

都市化・工業化の進展

工場労働者の増大

スラム街・労働者街の拡大

社会主義運動・労働運動・農民運動の高揚と労働者の組織化→社会主義政党の成立

新中間層 企業の管理事務やサービス部門労働者（ホワイトカラー）・技術者（エンジニア）なども増加

都心は上下水道・街灯も整備され、デパートなどの消費センターも出現

1889年のパリ万国博覧会でエッフェル塔、1900年のパリ万国博覧会で電気館が話題＝電気の時代

電車の発明→地下鉄が都市の交通網として大都市に普及

新中間層は都市の消費生活と文化の担い手となり、大衆文化の中心

ベル・エポック（良き時代）

19世紀末の景気の回復を背景に世紀末文化の繁栄

国民統合の深化

社会立法の整備

社会保険制度など社会保障の整備，労働環境の改善

男性普通選挙の普及

政党の組織化進み，新聞などマスコミの重要性が増大

公教育（国民教育・初等教育）の普及

「国語」の読み書きなど，工場での労働や軍隊に必要な知識・規律の育成

労働者へも，「新中間層」への社会的上昇の手段を提供

「道徳」・「歴史」教育などを通じ，「国民」意識を育成し，個々人の国家への統合を図る

→最有力な民族の文化（言語・宗教など）が他の民族に強制され，民族問題の原因となることも

社会主義思想の変遷

社会主義

生産手段の社会共有と人民のための民主的な社会の建設

空想的社会主義

- マルクス命名。現実認識不十分で理論は空想的
- ロバート・オーウェン…英の工場主
 - 米でニューハーモニーの共産社会実験
 - サン・シモン…仏の空想的社会主義者
 - 資本家による貧困者救済と合理的産業社会
 - フーリエ…仏の空想的社会主義者
 - 生産協同組合的理想社会の実現主張
 - ブランキ…フランスの革命家
 - 暴力革命と無産者の独裁・獄中生活
 - ルイ・ブラン…仏の社会主義者。二月革命指導
 - 臨時政府の労働委員会で国立工場→失敗

無政府主義

- ブルードン「財産とは何か」…仏の無政府主義者
- あらゆる政治的権威を否定
 - 仏のサンディカリズム（労働組合主義）に影響
- バクーニン…ロシア人でブルードンの弟子
- マルクスと論争し第一インターナショナル除名
 - パリ・コミューンの評価で対立
 - ロシアのナロードニキに影響
 - フランスのサンディカリズムにも影響
- ジョルジュ・ソレル…サンディカリズムの思想家
- 議会否定し、労働組合のゼネスト主張

科学的社会主義

- マルクスとエンゲルスが空想的社会主義に対し命名
- 資本主義社会の没落を必然。階級闘争理論
- マルクス「資本論」…未完の名著
- 「共産党宣言」…万国の労働者よ団結せよ
- エンゲルス「家族・私有財産・国家の起源」
- レーニン「帝国主義論」
- ロシア革命指導
- ローザ・ルクセンブルク
- スパルタクス団蜂起で惨殺の女性革命家

修正主義

- 革命によらず議会主義による社会改革実現主張
- 一次大戦後、社会民主主義の中心
- ベルンシュタイン
- 19世紀末ドイツ社会民主党右派の理論指導者
- ジャン・ジョレス
- 仏社会党指導。一次大戦に反対し暗殺

社会主義の国際組織

第1インターナショナル

- * 国際労働者協会としてロンドンで結成
- * 1864年ポーランド反乱支援を契機
- * マルクスが創立宣言と規約を起草
- * マルクス派 v s 無政府主義（アナーキズム）
→バクーニンの除名
- * パリ・コミューン支援し、各国政府に弾圧
- * 1876年解散



第2インターナショナル

- * 1889年フランス革命100年記念し、パリで結成
- * 別名国際社会主義者大会で3年に1度大会
- * ドイツ社会民主党が指導的地位
- * 無政府主義と修正主義否定も、後者は不徹底
- * 第一次大戦前の最大の反戦組織
- * 1914年崩壊



第3インターナショナル

1923-45

- * 社会主義労働者インターナショナル
- * 英労働党中心

- * 1919年ソヴィエト政権結成
- * 国際共産党<コミンテルン>と称し各国共産党を支部として支配。本部モスクワ
- * 当初世界革命達成目的
→ハンガリー革命指導・トルコ・中国援助
- * 人民戦線戦術…35年の第7回大会で決定。反ファシズム勢力結集
- * 1943年連合国との結束強化を図るスターリンに解散



コミンフォルム

1951…

- * 社会主義インターナショナル

- * 1947年結成。共産党情報局
- * マーシャルプランに対抗
- * フランス・イタリア共産党参加
- * 48年ユーゴ除名
- * スターリン批判の55年に解散

近現代の科学技術史

産業革命

18 初；ニューコメン・蒸気機関：炭坑での排水に使用
1733；ジョン・ケイ・飛杼：織布の速度を2倍→紡績機の発明を準備
1735；ダービー父子・コークス製鉄法：木炭に代わる石炭の利用
1764；ハーグリーブス・ジェニー紡績機
1769；ワット・蒸気機関の改良：回転運動を可能とし、工場や交通機関の動力源に利用
1769；アークライト・水力紡績機
1779；クロンプトン・ミュール紡績機：ジェニーとミュールの長所を併せ、紡績機の原型確立
1785；カートライト・力織機：織布分野で織機の原型確立
1793；ホイットニー・綿繰り機：綿と種子の分離を機械化→アメリカ南部が綿花栽培地帯に
1802；トレヴィシック・蒸気機関車発明
1807；フルトン・蒸気船
1814；スティーブンソン・実用蒸気機関車：1830年マンチェスター・リヴァプール間開通

19世紀の科学

マイヤー；ヘルムホルツ…独・エネルギー不滅の法則：内燃機関の発明に道
ファラデー…電磁気の研究：電信・電話・各種電気製品などの発明に道
リービヒ…独・有機化学の基礎：化学肥料や、化学繊維の発明に道
レントゲン…独・X線の発見
ダーウィン『種の起源』…1859年英・進化論→社会進化論に影響
メンデル…オーストリア・遺伝の法則
パストゥール…仏・低温殺菌法→ワイン・乳製品の長期保存を可能に・狂犬病予防
コッホ…独・結核菌、コレラ菌発見
キュリー夫妻…仏・ポーランド、ラジウムの発見

19世紀…20世紀初頭の技術発明

ノーベル…スウェーデン・ダイナマイト：ノーベル賞の制定
モールス…米・自記電信機
ベル…米・電話機→電話会社設立
マルコーニ…伊・無線通信→通信会社設立
エディソン…米・蓄音機、白熱電球、映写
ディーゼル…独・内燃機関（軽油エンジン）
ダイムラー…独・内燃機関（ガソリン機関）- 自動車の発明→ダイムラー社発展
ジーメンス兄弟…独・電気メッキ・電動機（電車）・ガラス製造→ジーメンス社発展
クルップ…独・鉄鋼と大砲生産→一大兵器産業で死の商人
ベッセマー…英・製鉄炉の新技術確立→独のクルップ社や米のカーネギー社に採用
ライト兄弟…米・飛行機

20世紀物理学

アインシュタイン…独→米・相対性理論
プランク…独・量子論創始
ボーア…デンマーク・量子力学の基礎
ハイゼンベルク…独・量子力学・原子核

20世紀の技術発明

フォード…自動車製造にオートメーション
ラジオ放送・テレビ放送・化学繊維・レーダー
原子力発電・人工衛星・アポロ11号・半導体
コンピューター

社会主義思想の用語

*社会主義

工業化の進展による資本主義社会の成長が生み出す経済的・社会的諸矛盾を、私有財産制の廃止、生産手段および財産の共有・共同管理などによって解消し、平等な社会を実現しようとする思想および運動。マルクス主義・無政府主義・社会民主主義などを含む広い概念。

*空想的社会主義

自らを科学的と称したマルクス・エンゲルスが、オーエン・サン＝シモン・フーリエらの社会主義思想を批判して命名した言葉。社会の法則的把握やマルクス主義の主張する階級闘争の理論に基づかず、教育による倫理の向上や人間性の変革に期待し、理想的未来社会の実現を目指した思想。ユートピア社会主義。

*ロバート＝オーウェン (1771-1858)

イギリスの空想的社会主義者。小手工業者の家に生まれ、10代で商店の奉公人となり、そこから身をおこしてついにニューラナークの紡績工場の経営者となる。経営に手腕を発揮し「綿業王」として人々の尊敬を集め、立志伝中の人物とみなされる一方で、労働者の環境改善や子弟の教育に積極的に取り組み、ニューラナーク工場に幼稚園を併設した。1825～29年に私財を投じてアメリカに共産社会「ニューハーモニー」を建設したが失敗して財産を失い帰国。自らも労働者階級の一員となって、著作で私有財産制や既成宗教の批判を繰り返し、1833年の一般工場法の制定に影響した。33年に全国労働組合連合を組織することに成功したが、内部分裂と政府の弾圧で34年には崩壊した。その後はチャーティスト運動のような政治運動からも離れ、晩年は困窮の中で没した。

*サン＝シモン (1760-1825)

自由主義貴族としてアメリカ独立革命に参加し、フランス革命では財産を没収されたものの革命を支持。迫り来る産業革命を前に、産業革命後の社会を効率的に再組織する方法を研究。特権階級を排除し、産業者を中心に合理的に運用される社会を構想した。また相続税によって財産を再配分し、機会の平等を図ろうとするその思想は、空想的社会主義の先駆けとされ、弟子たちによってサン＝シモン主義として宣伝された。第二帝政のナポレオン3世にも影響を与え、ナポレオン3世のボナパルティズムは資本家を優遇する一方で、労働者の生活も保障し、そのバランスの上に独裁権力を構築するものであった。

*フーリエ (1772-1837)

フランスの空想的社会主義者。商業に支配される文明と、労働が義務的で無味乾燥となっている現状を批判し、人間性の全体的回復を唱え、ファランジュ（ファランステール）と呼ぶ協同組合の共同体を基礎とする理想的な未来社会を構想。生涯不遇で貧窮のうちに没したが、その思想は弟子たちを通じてフランスの協同組合運動に大きな影響を与えた。マルクスによってオーウェン・サン＝シモンと共に三大空想的社会主義者とされた。

*ブランキ (1805-81)

フランスの革命家。総裁政府に対して政権転覆の陰謀事件をおこしたことで知られるバブーフを尊敬し、少数精鋭の武装蜂起によるプロレタリア独裁政権樹立を目指し、

七月革命・二月革命・第二帝政期を通し、蜂起・投獄・亡命を繰り返し、生涯の36年を獄中に過ごした。

*ルイ＝ブラン (1811-82)

フランスの社会主義者で二月革命で労働者を指導し、臨時政府の一員となる。労働代表（リュクサンブール）委員会を組織し、労働者の保護立法に努める一方で持論であった国立作業場を設置。しかし国立作業場は登録人員がパリ人口の1割にあたる10万人を突破し、国家予算を空費するブラックホールと化して国民の怒りをかい、4月総選挙で社会主義者が惨敗する要因となった。国立作業場閉鎖に反対した労働者が暴動をおこすと（六月暴動）、罪に問われてイギリスに亡命。70年に帰国したが、パリ＝コミューンには政府側にたつて反対した。

*無政府主義

国家権力を人民を抑圧するものとして否定。相互扶助の社会を理想とし、歴史の発展で必ず実現する、全ての人間が相互扶助を行う理想的社会では、国家権力（中央政府）は必要なくなると説く。ブルードンによって定式化された。バクーニンは、理想社会実現のための革命を提唱し、その思想はロシアのナロードニキや、議会を否定し、労働組合のストライキによって政治権力を打倒しようとするフランスのサンディカリズムに影響を与えた。

*ブルードン (1809-65)

フランスの社会主義者で「財産とは何か。盗んだものである」と宣言して有名になった。国家権力を自由を抑圧するものとして否定し、自由な個人の相互扶助の社会を理想として無政府主義の父と言われる。

*バクーニン (1814-76)

ロシア貴族の子として生まれ、パリに出奔してブルードンやマルクスと親交を深め、ブルードンの影響下に無政府主義思想を形成。1849年にドイツで暴動を指揮してシベリア流刑となるが、1861年に脱走。68年にロンドンに渡り、第一インターナショナルに加盟した。しかし、国家を逆用して国家権力をプロレタリアートで独裁することで社会主義を実現しようとするマルクスと、国家を否定することで人間の自由が達成されるとするバクーニンとの対立は明らかで、パリ＝コミューンの評価を巡って72年に除名された。暴力的手段によってでも国家権力を絶滅させるべきとし、その手段として農民と下層市民の武装蜂起を期待したその思想はロシアのナロードニキ運動の基盤となり、フランスのサンディカリズムやイタリア・スペインの革命運動にも影響を与えた。

*マルクス主義

マルクスとエンゲルスにより確立された思想体系。史的唯物論に立脚、人類史は生産力と生産関係の矛盾により展開し、資本主義も私的所有と社会的生産との矛盾から社会主義へ移行せざるをえないとする。そして歴史的発展過程での社会変革は階級闘争により実現するもので、資本主義社会の中で搾取され、疎外された労働者が社会主義社会の担い手として形成され、階級闘争を通じて社会主義・労働者解放を実現すると説く。ロシア革命をはじめ、社会主義運動・労働運動・民族解放運動の指導理論となり、現代社会に多大な影響を与える。

***カール＝マルクス(1818- 1883)**

ドイツ生まれのユダヤ系思想家。ドイツのフォイエルバッハの唯物論哲学と、イギリスの古典主義経済学と、フランスの社会主義思想を批判的に統合し、マルクス主義として知られる思想体系を確立。ウィーン体制崩壊の年の1848年にエンゲルスと共に著した『共産党宣言』は、始まりの「ヨーロッパを妖怪がさまよっている。共産主義という名の妖怪が」と、結びの「万国の労働者よ団結せよ」で有名である。パリにおいてプルードンなどのフランスの社会主義者と交流したのち、ウィーン体制崩壊時の三月革命の発生でドイツに帰国したが、革命の敗北と共に1849年ドイツを追放されてロンドンに亡命。以後貧苦の中で大英博物館に通って研究を重ね、1867年に主著「資本論」の第一巻を出版。その一方で第1インターナショナル(国際労働者協会)の設立にも関わり、終生国際共産主義運動に尽力した。

***エンゲルス(1820- 1895)**

ドイツの革命家・思想家。ドイツの紡績工場主の子に生まれた。マルクスと科学的社会主義を創始し、「ドイツイデオロギー」「共産党宣言」を共同執筆。自らをマルクスに比して「第二バイオリン」と称し、1849年にイギリス亡命後は、マンチェスターで家業であった紡績業を営み、マルクスの生活を支えている。また、マルクスの「資本論」第二、三巻を整理・刊行。自身の著作としては「家族・私有財産・国家の起源」など。

***レーニン(1870- 1924)**

ロシアの革命家・政治家。ロシア革命の指導者。本名はウラジミール＝イリイチ＝ウリヤノフ。小貴族の家に生まれた。兄はナロードニキ運動に参加し、皇帝アレクサンドル3世暗殺未遂事件の主犯として絞首刑となっている。その兄の影響で革命運動に参加し、マルクス主義を知り、ロシア最初のマルクス主義政党、社会民主労働党に参加。社会民主労働党が第2回大会(事実上の結党大会)でメンシェヴィキとボリシェヴィキに分裂すると、職業的革命家による前衛党組織を唱え急進派のボリシェビキを指導。労農同盟、戦争の内乱への転化、プロレタリア革命を主張した。三月革命時にはジュネーブに亡命していたが、ドイツ軍の協力を得て封印列車で帰国。四月テーゼを発表して「戦争の即時停止」と「全ての権力をソヴィエトへ」と唱え、十一月革命を指揮しソビエト政府を樹立、首班となる。内戦と対ソ干渉戦争の時期には「全てを戦場へ」のスローガンのもと戦時共産主義の経済政策をとったが、それによってロシア経済が崩壊すると、限度内での資本主義復活を認めたネップを推進した。しかし、1924年に革命事業建設の途上に53歳で病死し、のちにスターリンの暗黒時代を招来することになった。第二次大戦時のイギリス首相として有名なチャーチルは言っている。「ロシア国民にとって最大の不幸は、レーニンがこの世に生まれてきたことだった。それに次ぐ不幸は、レーニンが途中で死んでしまったことである」著作に帝国主義と金融資本の関係を解明した「帝国主義論」がある。

***ローザ＝ルクセンブルク(1870- 1919)**

ポーランド出身のドイツの女性革命家・経済学者。社会民主党左派の理論的指導者として修正主義派のベルンシュタインや中央派(主流派・日和見派)のカウツキーと論争。第一次大戦に反対しカール＝リープクネヒトらとスバルタクス団を結成し反戦活動に従事して投獄された。1918年のドイツ11月革命で出獄し、ドイツ共産党を創立。1919年1月に20万の労働者を組織してスバルタクス団蜂起に参加したが、社会民主党臨時政府に鎮圧され、逮捕された後、連行中に右派将校に虐殺された。著「資本蓄積論」など。

***修正主義**

マルクス主義の革命路線を修正し、議会を通じての改良政策によって社会主義を実現できると主張する立場。ドイツ社会民主党のベルンシュタインを中心とする右派の主張に始まる。一次大戦後のドイツ社会民主党の中心思想となる。のちマルクス主義右派を批判する語としても用いられる。修正社会主義。

***社会民主主義**

マルクス主義政党であったイギリスの社会民主連盟、ドイツの社会民主党、ロシアの社会民主労働党に「社会民主」という名称が用いられているように、第一次大戦以前はマルクス主義に基づく社会主義を社会民主主義と言った。しかし最大のマルクス主義政党であったドイツ社会民主党内に暴力革命を否定するベルンシュタインの修正主義が台頭し、一次大戦後の社会民主党の主流となったこと、ロシア革命の中心となったレーニンたちボリシェヴィキが自らの政党を共産党とし、修正主義に敵対したことから、第一次世界大戦後はマルクス主義を共産主義、暴力革命とプロレタリアート独裁に反対する、修正主義を始めとする非マルクス主義の議会中心の社会主義を社会民主主義と称するようになった。

***ベルンシュタイン(1850- 1932)**

ドイツの政治家。社会民主党の理論家。社会主義者鎮圧法に反対してロンドン亡命中にエンゲルスとも親交を持ったが、しだいにマルクス主義の革命理論に疑いを持ち、「社会主義の前提と社会民主主義の任務」を著し、修正主義理論を展開。カウツキーやローザ＝ルクセンブルクと論争した。第一次大戦に際しては、反戦の立場から独立社会民主党の結成に加わったが、一次大戦後は社会民主党に復帰した。

***ジャン＝ジョレス(1859～1914)**

フランスの社会主義政治家。エコール＝ノルマル(高等師範学校)で学び、トゥールズ大学で哲学教授をつとめたのち、26歳で国会議員となる。ドレフュス事件では、ドレフュス擁護に活躍した。マルクス主義の影響を受けながらも、議会による改良主義を主張し、マルクス主義派とは対立関係にあったが、第二インターナショナルの決議に基づいてフランスの社会主義者の団結に努力し、マルクス主義派とともに1905年統一社会党を結成した。反戦平和を訴えて活躍したが、一次大戦勃発によるナショナリズム高揚の中で、熱狂的愛国者に暗殺された。

